

悦三郎氏の遺志脈々と

受け継ぎ節目の100回講演

水沢日本外交協会 設立30周年

国際情勢を中心とした講演会事業を繰り広げてきた水沢日本外交協会(亀卦川富夫会長)は今年、設立30周年を迎えた。17日には100回目となる記念講演会が市文化会館(Zホール)で開かれ、市民ら約200人が渡辺利夫・拓殖大学総長の講演に耳を傾けた。

(見玉直人)

同協会は一般社団法人日本外交協会(池浦泰宏理事長)の地方支部的な位置付けで、84(昭和59)年に発足した。

日本外交協会は「憲政の神様」「議政政治の父」と呼ばれた尾崎行雄(尾崎巽堂)の指導の下、戦後間もない47年に民主外交協会として設立。国際社会に

対する知識や外交感覚を養ってもらおうと、講演や出版活動などを展開してきた。

74年、水沢出身の政治家、故・椎名悦三郎氏が会長に就任し日本外交協会に改称。その後、椎名氏が水沢に帰郷した際、当時の水沢青年会議所の会員らに「国際社会を学ぶような機会を設けるべきだ」と提言し、水沢日本外交協会が設立された。

初回の講演会は84年3月20日、水沢出身で現共同通信社国際戦略本部幹事の山口光氏を

講師に迎えて開催。その後、現役政治家やメディア関係者、地元首長、大学教授ら多様な顔ぶれを招いた。

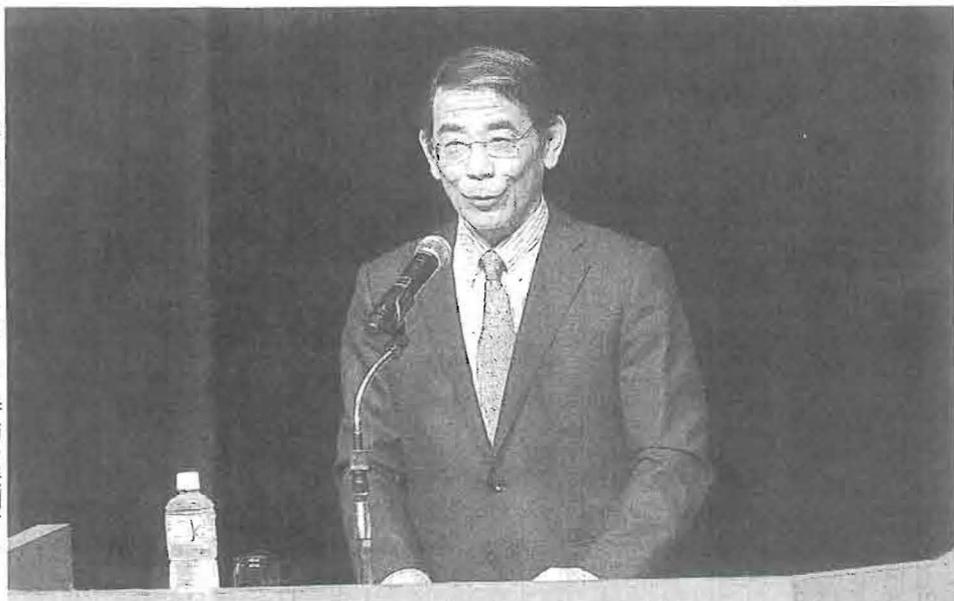
講演内容も国政から地域行政、学術など多岐に及んだ。その時々話題や時事問題に沿った講師や演題をお願いしている」と亀卦川会長。北朝鮮による拉致問題の国民的関心の高まりを受け、北朝鮮情勢に詳しい重村智計・早稲田大学教授を招いたこともある。

最近では国際リニアコライダー(ILC)誘致に関連し、素粒子研究者や天文学者らによる講演も開催。基本的には会員向けの小

規模な講演が多いが、節目の記念講演などでは一般市民にも公開している。

100回の節目となる講演では、拓殖大学の渡辺利夫総長を講師に迎えた。中国とベトナム、フィリピンが南シナ海を舞台に繰り広げている領有権争い、日中韓との間の領土問題など緊張感高まる昨今の東アジア情勢などを話題に取り上げた。

亀卦川会長は「今後も身近な話題から世界情勢も含め、地域や日本がどう歩むべきか、じっくり考えられるような講演会を企画していきたい」と話す。



日中韓の領土問題などについて持論を展開する渡辺利夫・拓殖大総長

歴史背景を踏まえ 日中韓情勢で持論

拓殖大の渡辺総長は17日、市文化会館(Zホール)で講演。中国や韓国がたどった歴史的な歩みに触れながら、緊張高まる東アジア情勢について持論を展開した。

冒頭、同大学の第3代総長を務めた後藤新平や二代目学監だった新渡戸稲造など、郷土出身の偉人の足跡など

にも触れた渡辺総長。講演の主題となる東アジア情勢、特に日中韓の領土問題については「中国や韓国がなぜ、あそこまで厳しく領土のことや日本に対する反発的な行動を取るのか。それを理解するには、彼らの価値観や国際秩序観念についての考え方を知る必要がある」と切り出した。

中国の習近平国家主席が掲げている「中華民族の偉大な復興」が重要なキーワードだとし、「70年前のアヘン戦争で敗北を喫する以前の、つまり清王朝時代に帰属したい」との思いがうかがえる。経済成長を遂げた今だからこそ、「屈辱的な近代史」からの復興を遂げよう」と。話し合えば簡単に片付く類のことでないことが分かる」と述べた。

92年に制定された中国国内法・領海法で、台湾や沖縄県の尖閣諸島、ベトナムやフィリピン近海の島々について「中華人民共和国に属する」と明記している点にも触れ、「当時、日本政府は中国大使を呼んで口頭で抗議をしたそうだが、それだけでは済まないような中身。いかげんな外交があったのではないかと批判した。」

渡辺総長は同日、水沢区大手町の後藤新平記念館(高橋力館長)で始まった企画展の様子も見学した。